1/16 ルカの福音書 15 章 11-32 節「見つけられて喜び祝われて」

小池宏明牧師

有名な放蕩息子のたとえは、弟息子の放蕩ぶりが目立つが、兄息子も父に不信感を抱きながら仕えて来たわけで、「失われた息子たち」のたとえとも言える。また、父なる神様のご愛に注目すれば、「天の父の愛のたとえ」とも言えるだろう。

＊弟息子の放蕩と父の愛

弟息子は、家を出て自由になりたかったのだろう。自由を求めることは大切だが責任が伴うことだ。それは自己中心や自分勝手に生きることとは全く違う。父に背いて出て行った弟息子は湯水のように財産を使い果たし、貧しくなり、奴隷以下のような不自由な状況に陥ってしまった。(12-16 節）ようやく弟息子は、自分の罪深さに気づいて、父の元に帰る決心をしたのだ。一方、父親は、毎日毎日、弟息子の帰りを待っていた。息子の帰りに気付いた父は、まだ家から遠かったのに、一目散に走り寄って息子の体を抱いて口づけして、息子として迎え入れたのだ。(18-24 節）当時の有力者は長服を着ていて、走ることは威厳を失う恥さらしであったが、父親は恥も外聞もかなぐり捨てて、息子の元へ。これは、父なる神様の捨て身の愛を表している。

＊兄息子の放蕩と父の愛

ところが、兄息子は父親の振る舞いに腹を立てた。放蕩三昧の末にのこのこと帰って来た弟息子を、大喜びして迎えた父親に対して、兄息子は怒りを露わにして、父に不満をぶつけた。(28-30 節）兄息子は、父親に愛されているのに気が付いていなかった。いつも近くに居ながら、心は父から離れていて、霊的には兄息子も家出をして飢えている状態だった。兄息子も父親から見れば、失われた息子だった。しかし、父親は、怒って祝宴の席に入らない兄息子のために、自ら出て来て彼をなだめるのだ。(31-32 節）当時、宴会の主人が、席から離れることは、まことに恥ずべき威厳を失う行為だった。しかし、父親は、兄息子を迎えに出て来た。ここにも父なる神様の謙り愛が現れている。

＊天の父の愛の応えて

私たちは、自らが兄息子のようであっても、弟息子のようであっても、父なる神様から遠く離れて、心が飢え乾いていることに気付き、父なる神様の元に立ち帰るならば、神様は喜んで迎え入れて下さるのだ。私たちは、父なる神様が、愛する独り子イエス・キリストを罪と闇に覆われたこの地上に遣わし捜し出して下さったことを忘れてはならない。私たちは父なる神様の子どもとして、神と隣り人とを愛して生きるという、この上ない喜びの道を選び取らせて頂きたい。